

「陽子の一枚の布」シリーズに於ける「SHIBORI」の役割

40 年間の作品発表を中心に

The Role of SHIBORI in the “Yoko’s One Piece of Cloth” Series:
At the Center of Exhibitions for 40 Years

伊藤 陽子

Yoko ITO

Abstract

In 1968, I graduated from university and, in the same year, started doing freelance work as a clothing designer. A turning point came in 1970 with my marriage, when I developed a close tie with the local Arimatsu shibori production. But I involvement with shibori was not in the traditional sense, but rather to find a way to incorporate shibori techniques into modern fashion. In the meantime, I continued to work on individual design projects, such as “Yoko’s One Piece of Cloth.” Presentations were given as conferences, lectures, exhibitions, and fashion shows. I have continued to strive towards fusion of shibori, promotion of local textile production, as well as individual design projects.

Keywords : Yoko's One Piece of Cloth（陽子の一枚の布）、SHIBORI、World Shibori Network、知多織物工業組合連合会

はじめに

衣裳を商業ベースにのせるものとしてデザインを始めたのは大学を卒業してすぐの 1968 年からである。当時は大阪のアパレル企業においてデザイン・企画ルームへの教育・指導に行っていたがその指導と共に、ニット製品のデザインを行い製品化した。また、在学中よりデザイン教育に係わっていた日本ヴォーグ社主催の社団法人日本編み物文化協会のメンバー教室において、顧問として、手編み編み物のデザインを行い、ファッションショー作品としていた。1970 年に結婚して名古屋へ戻り、これを契機に「有松絞り」の振興に従事し、「絞りの洋装化」へ向けてテキスタイル開発、デザイン開発に係わった。衣裳デザインに関しては当時の通商産業省の管轄下で産地振興のために日本各地の地場産業の振興に係わっていた。

作品展示を始めたのは 1984 年、中部伝統染色工芸研究会が主催した「絞りシテイーなごや 伊藤陽子創作展」からである。このときから世界中の「SHIBORI」を使用してのデザイン活動となった。（1994 年開催第 1 回世界絞り会議より世界共通語として「絞り」を「SHIBORI」と記すこととした。これはこれまでの英語表記「tie dye」による「緋」と「絞り」との区別をつけるためでもある。以降「SHIBORI」と表記する。）

デザイン活動の一方では、大学時代の担当教官石山彰先生の指導の下に、私が有松産地に直結していることを利用して「SHIBORI」の研究を始めていた。

「SHIBORI」をアパレル製品化する為に衣裳をデザイン・制作をするにつれて、自分自身の作品制作においては「一枚の布」で衣裳を制作することに惹かれていった。

I. 「陽子の一枚の布」デザイン制作の目的

1. 私がファッションデザインをして作品にしたいと思うテキスタイルは非常に芸術性が高く、ハサミを入れることを戸惑うほどの布地が多かった。
2. 糸からテキスタイル制作に関わり、その現場を共有していたことで、織屋さんの汗の結晶である大切に織られた布地の、ほんの少しの布でも大切にしたいと思った。
3. 一番大きな理由は、「一枚の布」で制作することによりできあがる「造形美」に惹かれ、その美への「探求」であった。

II. 「陽子の一枚の布」へ「SHIBORI」を活用する方法

1. 「SHIBORI」の布の持つ伸縮性をいかして、サイズフリーにする。

- 1) 1992年：チタテキスタイルフェアファッションショー「A Refreshing Country Wind-CHITA」のための作品100点の中の1つ。(図1)(図2)

ポリエステル100%のテキスタイルに「やたら三浦」の技法で絞り、高温、高圧釜に入れパーマネントプレスをしたもの。この方法は、当時愛知県三河繊維技術センターに置かれていた機械での実験的な試みであった。その後有松絞り産地の染色工場に機械を設置し本格生産になり、昨今のブームを起こした。

布地幅いっぱいが横幅で、たては肩の縫い目はなく、前後続いて「一枚の布」で作成。首を寛頭衣風にあけてある。脇はグログランリボンで止めるようにした。



図1. ウエディングドレス



図2. 知多勤労会館でのファッションショーの様子

- 2) 1999年：「III SIMPOSIO INTERNACIONAL DE SHIBORI in CHIRI」での参加作品のうちの1点。(図3)(図4)

世界各国からの作品によるファッションショーに日本代表として参加した作品。(当時の写真は不明)

ポリエステル/コットンへ段染めで「SHIBORI」を形状記憶させた布地で制作したワンピースに、コットン100%の4重ガーゼを絞り藍染にし、塩縮加工をして形状記憶させたテキスタイルでマーガレットを作成。アンサンブルとして出展した。

この国際絞り会議は作品展示、口頭発表、ワークショップ、作品販売、ファッションショーを行う。

私は作品展示「COMBINED DREAMS」、口頭発表「SHIBORI for WEARABLE ART」、また「CHIRI NACIONSL MUZE」に於いて開催されたファッションショー、の3部門に参加した。



図3. ワンピース



図4. マーガレット

2. 「SHIBORI」で作成された「一枚の布」を使用する。

- 1) 1984年9月：「セネガル絞りウエアー ファッションショー」(図5)(図6)

アフリカでのフランス植民地であったセネガルはフランス衣料の生産基地でもあった。近国のナイジェリアと共に輸出産業として藍染の絞り布地を生産していた。その中では非常に手のこんだものがタペストリーになっていた。デザインも伝統的なもの、技法も伝統技法であった。しかし一方では化学染料でどぎつい色に染めた布地も制作していた。出来るだけ布地そのまをを生かしてデザインした。藍染めが中心。紺などはその上に「SHIBORI」を行った。また、藍を「SHIBORI」で抜染して濃淡を出す技法も用いた。

アフリカ土民の酋長らが着用する衣装には独特のデザイ

「陽子の一枚の布」シリーズに於ける「SHIBORI」の役割

ンがあり、この時の研究は、わたくしのデザイン活動において非常に貴重なものになった。太平洋戦争前には有松絞り産地とアフリカは絞りの輸出入貿易が盛んであった。



図5. セネガル絞りウェア ファッションショー
名古屋 名鉄百貨店で開催された市民参加のファッションショー



図6. 電通作成の名古屋名鉄百貨店のポスター及び
新聞広告 洋装が伊藤デザイン・制作 藍染め作品

「SHIBORIの一枚の布」でのデザイン活動は1984年中に続けて何度も展示会が開催されたことで、世界中の色々な「SHIBORI」を使用することが可能になった。「SHIBORI」の研究の中で述べてきた、「絞りはもっとも原初的な染色方法³であり、世界中にその原発的な産地が存在する」が、実際に体感でき、この後の研究に非常に役立った。

2) 1984年12月：「有楽町西武オープニング記念個展絞り作家竹田耕三/伊藤陽子 二人展」(図7)



図7.ダイレクトメール

3) 1989年11月：世界デザイン博覧会参加イベント「第二回絞りシティなごや'89」(図8)(図9)



図8. 愛知産業貿易会館本館の展示会場



図9.ダイレクトメール

4) 2001年1月:「一枚の布」 アジア民族造形学会 中部デザイン会員作品展出品 (図10)

これは後年にデザイン制作したものであるがアフリカの藍染絞りである。手紡の綿が手織で10cm幅に織られている布を何枚も横につないで一枚の布地にしてある。その上に藍染めで「SHIBORI」をしてタペストリーになっている。そのタペストリーを1枚使用してジャケットを作成した。



図10. 名古屋ナディアパーク

知多織物工業組合連合会のテキスタイル開発において、開発したテキスタイルは毎年一部の布地を必ず「有松絞り」にした。ファッションショーでもひと舞台分は「SHIBORI」を使用した。ポリエステル100%、綿とポリエステルとの混紡、ケナフ、オーガニックコットン、ポリノジック、リヨセル、テンセル、ハステックス、茶綿、ウール、ラミー、リネン、また、織り組織に於いても平織りから、ドビー、ジャカード、コーデュロイ、別珍、レース、ニット、4重ガーゼ、12重ガーゼ等、いろいろなテキスタイルを開発して、知多市、半田市、名古屋市でのファッションショー、展示会、また東京ビックサイトでのジャパングリケーションでの展示、東京デザイナーズ協議会のファッションショー参加デザイナーへのテキスタイル提供等をして来た。

その中で必ず「SHIBORI」を使用するというのには理由があった。有松に「有松絞り」が起こった理由は私の研究の中でも述べてきた³が1608年に尾張徳川藩のおふれが知多郡に出され、東海道でも追いはぎが出て物騒なところに英比の庄から9人が移り住み新町、後の有松村を作った。宿場に囲まれているので宿は出来ない。そこで道行く人に茶を出し、みやげ物を売って生計を立てなければならぬ。1610年名古屋城築城に来ている人の中に「豊後絞り」を身につけている人がいた。それを見た竹田庄九郎はこれを「有松村」の特産品にした。竹田庄九郎の出た英比(阿久比)の庄は綿産地で小幅の綿織物を織っていた。その布地を利用した、という謂れがあるので、この時も「知多

織物」と「有松絞り」を結びつける必然性を感じた。それにより両産地が結びつきお互いを利用できるようになった。

この両産地を結び付けるという仕事は、私の研究生活の中でも非常におおきな位置を占めていた。国を挙げての繊維産業振興政策としての、総合繊維見本市ジャパングリケーションの実行委員・トレンド委員として参加をしていく中で、より多くのテキスタイル産地、テキスタイル企業とのかかわりをもった。

ジャパングリケーションへの展示参加企業として知多織物工業協同組合はもちろんであるが、有松の絞り染色加工場も参加した。このことにより「SHIBORI」が多くのデザイナー、アパレル企業、テキスタイル企業にも認識され、幅広く技術を提供できることになった。また、J Cの海外進出展、香港、上海、ミラノ、パリ、に参加することにより、ヨーロッパをはじめとして世界中にアピールできた。東京ビックサイトでの開催にもシャネル、エルメスをはじめとする世界企業、山本寛斎、コシノジュンコ、コシノヒロコ、三宅一生のテキスタイルチーフ皆川魔鬼子等日本を代表するデザイナーたちも多く来場したが世界の舞台に立つという事は「SHIBORI」を広く知ってもらうだけではなく、そこへ参加する作者、染工場の眼を大きく開かせるものがあつた。私の創作活動の中での「一枚の布」がよりハイレベルで制作されるという、路を開いた。

5) 1986年:「藍染展」出品。2重ガーゼのコットンに藍染、「SHIBORI」、塩縮加工。(図11)

「SHIBORI」の凹凸を生かすということを、1992年に名古屋で開催した第1回国際絞り会議で採択し、それ以来、「レジスト」と呼び、その時まで「絞り」とは最後に「湯のし」にかけて平らにして使用する、さらに、薄い布地での着物制作などは「芯張り」をして硬くして使用する、と言うのが日本の習慣であった。しかし、世界の人々の「この立体性が美しい」という言葉を受けて会議以来「絞り作家」は立体性にとりくんだ。



図11. 2003年: 展示 ファッションライブラリー

「陽子の一枚の布」シリーズに於ける「SHIBORI」の役割

- 6) 1996年1月:「長良川」 ケナフへの「SHIBORI」(図12)
知多織物協同組合での開発テキスタイルである。2色に染められていた、少し幅広の小幅をワンピースの長さはふた幅使用。2色の身頃、袖、後ろのリボンは微妙に続いている。スカートの「板締め」は短い布地がスカート丈になっている。



図 12. 2003 年展示 岐阜市立図書館分館ファッションライブラリー「知多織物をデザインする」



図 13.14.15. 1996 年: 半田市繊維会館
'96 チタ・テキスタイルフェア「夢と希望とやさしさと」

図 13. はファッションショーのオープニングでの 1 枚の布地をアピールするための場面。「SHIBORI」ではないが、その雰囲気を持った「大理石」をプリントにしたものである。これは大理石の実物を浜松の大和染色に示し、その石数枚を京都の北村型屋へ運び、実物をプリント型にしてもらった。この方法は今日ではコンピュータ技術の発達で、あたり前のこととなったが、デザインをした平成 4 年はまだ珍しく、この型屋しかできないと言われ、世界中からの注文がきていた。7 枚の版型にし、その後何色ものプリントを作成した。この時は再度別色でプリントしたもの。

- 7) 1997 年:「河」'97 チタ・テキスタイルフェア「男と女」
知多織の素材開発の中で使用した「テンセル」に「板締め」(図 16)

テンセルはこの頃急に脚光を浴びていた「衣料外繊維」である。天然木材を溶剤に溶かして作るのでレーヨンとおなじに思えるがこの溶剤は全て回収できるので地球に優しい、といわれていた。しかし開発ははじめのテンセルはとても硬く、叩いたり、踏みつけたり、洗濯機で何度も洗ったり、乾燥機にかけたりして、何とか衣料にできる柔らかさにならないかと、苦労したものである。専門家が加わっての研究の結果、「バイオ」に食べさせることにより柔らかいテキスタイルにすることができた。このことは「テンセル」を非常に使いやすいものにし、また、「テンセル会」という独自のグループ方式をとることにより、低迷しかかっていた日本の繊維市場を 10 年間支え発展させた。10 年で役目は終えたが「テンセル」は市場に生き続けている。特に細い糸にしてアンダーウェアを作ったシリーズは「絹の感触」といわれ喜ばれた。中国産のシルク肌着より価格は高かった。その「テンセル」がまだ、硬く重たいときの布地に「SHIBORI」をしたので作家はとても大変であった。



図 16. 2003 年展示 ファッションライブラリー

- 8) 2005年5月：「陽子の一枚の布シリーズラクトロンの嵐紋り」

「THE FUTUR」(図17,18,20,22)

「outersupace」(図19,21,23)

たんぱく質繊維「ラクトロン」を使用しての「SHIBORI」地球に優しい繊維として牛乳から作られた「ラクトロン」が提案された。非常に薄く柔らかいテキスタイルとして出されウェディングドレスなどで発表された。私は有松の染工場と共同で「新しい夢のような布地を作ろう」とした。染色現場に出向き自分で染めたので、色のかけ具合に非常に気を配った。「嵐紋り」をして高温・高压釜にてプレスをした。「THE FUTUR」は2005年 The 6th International Shibori Symposium 2005 in JAPAN で FUSION: Wearable Art-Shibori Innovation Gallery Concept 21 に参加のために制作した。会場ではキュレータより上からつるす展示をされ、非常に好評を得た。

「outersupace」は同時期に開催した服飾文化学会作品展示として制作した。8月にドイツのベルリンで開催された「第31回世界洋服連盟会議ベルリン大会国際ファッションショー」(ホテルベルリン) に「THE FUTUR」は出品。また、8月26日に名古屋能楽堂で開催した「2005年 日本国際博覧会開催記念—NDK 78th collection (主催 社団法人日本デザイン文化協会 略称 NDK) へ岐阜所属メンバーとして出品。翌年には中国杭州レジャー博で社団法人日本デザイン文化協会岐阜支部が開催したショーにメンバーとして参加した。日本人のモデルと中国人のモデル、ドイツ人との衣裳表現の違いがこれからの研究に参考になった。



図17. 「THE FUTUR」前



図18. 後



図19. 「outersupace」 2005年5月 共立大学



図20. 2006年10月：杭州世界レジャー博「岐阜の日」協賛
2006NDK ファッションショー「雪・月・花」



図 図21. 杭州にて



図22. 「THE FUTUR」



図23. 「outersupace」

2009年展示 ファッションライブラリー

「陽子の一枚の布」シリーズに於ける「SHIBORI」の役割

- 9) 発表の為に制作。「SHIBORI」のスカーフ 10 枚でのデザイン (図 24,25,26)

その後、2008 年社団法人日本デザイン文化協会愛知支部発足 50 周年記念メモリアルモードショー「華の匠」に参加(図 27) (平成 19 年度愛知の名工「愛知県優秀技能章、名古屋市長功労者表彰、受賞で愛知所属に移籍」)
同年フランス MUSEE DU QUAI BURALY、PARISS で開催した 7th International Shibori Symposium、ISS での「International Designers Runway Showcase」に参加。(図 28)



図 24. 名古屋 ナディアパーク
アジア民族造形学会中部展



図 25.



図 26.



図 27. 「華の匠」 キャッスルプラザホテル名古屋



図 28. MUSEE DU QUAI BURALY、PARISS にて
ファッションショーの前

4. 「SHIBORI」をテキスタイルへのアクセントとして使用する。

- 1) 1999 年：「絞る」「きらめき」(図 29)

知多織で開発した「和紙の織物」に絞り加工。

平成 10 年頃からは「和紙の糸」がテキスタイル見本市に出展されはじめた。ジャパンクリエーションにおいても「和紙の糸」を展示しているブースは人だかりがしていた。

工業化された「和紙の糸」は「マニラ麻」を原料としていた。工業的に長く漉いた紙を細く裁断して長い「和紙の糸」を作っていた。知多織での商品開発には早くからこの糸に注目して取り組んでいた。織るのが非常に難しく、ゆっくりと動くシャトル織機なら、問題はないが、高速のエアージェットでは糸が切れてしまってもうまいことが多いことが多かった。また、出来上がりの様子も、レピア織機の方が風合いが良かった。この織は浜松の静岡県工業試験場で静岡県繊維協会 HFP メンバーとして実際に試織をした。

和紙は非常に形状記憶力があるので、わたくしが絞って加工した。上着は一続きの寛頭衣。ズボンは左右一枚ずつで出来ていてウエストベルトでとめている。右は後日(2000 年) 同じデザインで絞らないでスワロフスキーで飾るという加工をした一着を、岐阜市立女子短期大学のゼミ生と作成した。



「絞る」 「きらめき」
図 29. ファッションライブラリーに展示

- 2) 2004年5月：美濃和紙ファッションコンテストに参加するために作成した「サムイ」(図30,32,33)

学生は美濃和紙をそのまま使用して作品制作を行い参加。わたくしは岐阜のカワボウ繊維株式会社の織った「和紙のテキスタイル」を用いた。パーツの必要寸法に裁った一枚ずつを知多半島の「黒米」でエンジ色に染めた。大きいかさばったものであったが何度も染めることにより、希望する色になった。アクセントとして袖になる布地に「SHIBORI」をした。左右身頃、袖、左右のズボン一枚の布地である。それらを繋ぐ部分はすべてフリンジを結ぶという手法をとった。つまり、すべて黒米染めの和紙の糸で制作した。これは衣裳を着用して街を歩くことになっていたので当時の綿工連の会長にお願いした。



図30. 黒米染め「サムイ」和紙



図31. 肩



図32. 後



図33. 前

- 3) 2004年9月：「柔一SOFT」社団法人日本デザイン文化協会岐阜支部「2004～2005 ビスポークORIBEファッションショー」出品作品として制作。(図34)

伸縮性のあるウール地（岐阜いわなか）を横布使いで体をぐるっとひと巻きしている「一枚の布」アクセントとして絞りをつまみ、スワロフスキーで襟首等をふち飾りをする事によりパーティーウェアとした。研究室でゼミ生とともに制作した。



図34. ファッションライブラリーに展示

ウール地に「SHIBORI」を行うことは有松での洋装化開発初期の段階から試みていた。有松産地は本来スレン染料で染めるのが主であり、ウール染めはなかなか難しかった。藍染めにした時は甕の中で布地がとけてしまうという悲劇も味わった。また「SHIBORI」をするにも布地の厚さがネックになったようである。

産地に新しい息吹、方法を持ち込むことは、それはそれは大変なことであった。一方では、伝統的なものは自信があり何の迷いもなく、いつもの方法で作ればきちんとしたものが制作できた。

4) 2008 年 5 月:「よろこび」

日本基礎造形学会 第 19 回大会 福岡大会出品の為に制作 (図 35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,45,46)
 オーガニック・コットンのがら紡を織ったものを 30cm 角にして、1 枚ずつを染めその中に絞りを入れた。
 がら紡とは「落ち綿」を原料としてその他あらゆる布くず、糸くずを解きほぐして使い太い特殊糸を製造する原始的な紡績であり、またそれを織った布を言う。この材料は大正紡績のオーガニック・コットンを使用して一の宮の木玉毛織が織ったものである¹¹。
 染料は庭に咲く「ラベンダー」と知多半島の「黒米」「ペパーミント」。スカートは庭の「ペパーミント」と友人から夫の薬用にとプレゼントされた「ウコン」を使用した。



図 35. 発表風景



図 36.デザイン途中



図 37. ラベンダー



図 38.ペパーミント



図 39. 抜いた糸



図 40.縫う



図 41. ウエスト



図 42.方法



図 43. 後 考察— 1



図 44. 後 考察—2



図 45. リヨンでの展示後



図 46.メンバーと

5) 2008 年:「やすらぎ」“A piece of mind” (図 47,48,49)

日本基礎造形学会 作品集 2008 の為に作成。



図 47. 作品



図 48. 横



図 49. 後

4. 着物地としての「SHIBORI」を、そのまま使用する。

2

ヨ

1) 2004年9月：「剛—STRONG」 社団法人日本デザイン文化協会岐阜支部「2004～2005 ビスパークORIBEファッションショー」出品作品として制作。絞りの着尺でこれまで衣裳を制作した残りを使用しての作品。17本使用。ポディー上で三つ編みにしていくことで制作。

(図 50,51,52,53)

その後、杭州でのファッションショにも参加。



図 50. 作業中



図 51. 見ごろ



図 52. スカート



図 53. 岐阜展示：ファッションライブラリー

2) 2008年10月：「剛—BLUE」 フランスでのファッションショー用に制作。(図 54,55,56,57,58)

帰国後名古屋でのファッションショー「華の匠」出品作品の一つとした。「剛」の第2弾である。今回は未使用の藍染め着尺 13 反を使用したので、三つ編みが非常に難しかった。



図 54. パリのホテルでの制作中



図 55. 後



図 56. 横



図 57. 完成



図 58. 「華の匠」

「陽子一枚の布」シリーズに於ける「SHIBORI」の役割

3) 2009年7月:「絞りと花と」アジア民族造形学会中部展
出品のために制作。

(図 59,60,61,62,63,64,65,66,67,68,69,70,71)

藍絞染の着尺1本での制作。そこに糸での「絞り」を加え「花」をつくっていった。最初の布地計画以後はすべてボディー上での制作である。



図 59. 愛知芸術文化センター 美術館ギャラリー
アートスペース



図 60. 寸法割



図 61. ボディー上でのデザイン



図 62. 全身



図 63. デザイン中



図 64. デザイン中



図 65. 前



図 66. 後



図 67. 花

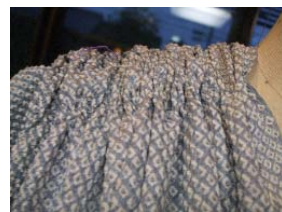


図 68. 肩



図 69. 左脇



図 70. 後



図 71. 右脇

おわりに

私が「陽子一枚の布」シリーズの中で特に「SHIBORI」へのこだわりを可能にしてきた要因には次のものがありました。

1. 有松、知多織という作品制作への十分なテキスタイル供給地があった。
2. テキスタイルを糸の段階から選び織り、染めをデザインして希望の布地を作成することが可能であった。
3. コストにとらわれずに、理想のフォルムを追求できた。
4. 作品を発表する機会に恵まれていた。

「一枚の布」という基は平面であるが、あくまでもボディ―を使用して立体としてデザインを考える。この時に現れる布地の主張する顔、フォルムの無限の可能性に魅了され、最高の幸せを感じる。

「一枚の布」でのデザイン制作は教育現場では学生たちへのよいデザイン材料になった。多くの作家の作品を示し、その美、テクニックの解説を聞くことは学生にとって新しい発見であった。

また、同じ部屋の中で私がボディ―に布地をかけながら「一枚の布」のデザイン・制作を行っていることは基の布地を見ながら、「エッ、なぜこんなになったの」という学生の持った興味から自分自身が作品制作を行うときにヒントとすることができた。

時には、学生と一緒に制作もしてきた。そのことにより学生はテクニックを習得し、より簡素化されたデザイン・制作の美に理解をもった。

このデザイン・制作を行うための材料としての多くの「SHIBORI」の布地、オーガニックコットン、ナチュラル・ダイのテキスタイルの山、また、それらをどのようにして手に入れ、どのようにに絞り、どのようにに染めたかという、説明は私にとっても、授業外の楽しみであった。

わたくしが「一枚の布」にこだわり「SHIBORI」にこだわることにより「美しさを追求」できるのは幸せである。これはこれからすすめていく。

礎造形学会事務局 p.6

- 10) 伊藤陽子『「地球の糸」へのデザイン提案～オーガニック素材に絞り加工をほどこしてのアパレル製品を提案する』アジア民族造形学会 中部支部 研究報告 Vol.1 2008 アジア民族造形学会 中部支部 p.3-4
- 11) 伊藤陽子『オーガニックの一枚の布から一よろこび』日本基礎造形学会 第 19 回福岡大会 概要集 p.19 2008 日本基礎造形学会
- 12) 『オーガニックコットンのがら紡をデザインする』基礎造形 017 日本基礎造形学会 作品集 2008 2009 日本基礎造形学会 pp.90-91

(提出期日 平成 22 年 11 月 29 日)

註・参考資料

- 1) 伊藤陽子『インド、グジャラート州 の Shibori』日本服飾学会誌 第 16 号 1997 日本学服飾会 pp.187-193
- 2) 伊藤陽子『有松絞りの歴史とデザイン』日本服飾学会誌 第 17 号 1998 日本学服飾会 pp.176-186
- 3) 伊藤陽子『有松絞りの研究パート I 有松絞りの歴史』岐女短紀要 第 49 輯 1999 岐阜市立女子短期大学 pp.117-124
- 4) 伊藤陽子『浮世絵にあらわれた絞』日本服飾学会誌 第 19 号 2000 日本学服飾会 pp.36-46
- 5) 伊藤陽子『有松絞りの研究パート II 絞りの新しいデザインと技術』岐女短紀要 第 51 輯 2001 岐阜市立女子短期大学 pp.151-158
- 6) 伊藤陽子『有松絞りにおけるデザインの研究—パート I 平面と立体—』基礎造形 011 2002 日本基礎造形学会 pp.29-36
- 7) 伊藤陽子『Akamai (Red rice)』餘白 亜細亞 4 個國 國際作品展 発表集 2002 韓國基礎造形學會 p.59
- 8) 伊藤陽子『有松絞りの新展開—作家・早川嘉英の活動を中心に—』日本服飾学会誌 Vol.3 No.1 2002 日本学服飾会 pp.73-81
- 9) 伊藤陽子『河』日本基礎造形学会作品集 No.00 2003 日本基